

## 式 辞

令和5年度がスタートしました。今日から、皆さんは、1学年ずつ進級されました。おめでとうございます。

さて、文部科学省の通知を受け、愛媛県でも学校教育活動に当たって、生徒及び教職員にマスクの着用を求めないことが基本となりました。なお、地域や学校の実情、混雑した公共交通機関など場面によっては着用を推奨することがあること、マスク着用の有無による差別や偏見があってはならないことを申し添えます。

ちょうど3年前の今頃はマスクの入手が本当に困難で、ドラッグストア店頭「マスク入荷の予定はありません」という張り紙の文字が、販売員の悲痛な叫び声のように見えたものです。

コロナ禍において、マスクをしたまま「初めまして」、中にはマスクをしたまま「お世話になりました」と挨拶をして、それきりの人もいたように思います。笑顔も顔半分、握手も交わさず、同じテーブルを囲んでの食事もなし。コロナ禍を生きるための新しい生活様式は、安心感と同時に私たちの生活に味気なさをもたらすことになりました。

マスク生活が始まった頃に、ある新聞記事に目が留まりました。顔や表情の研究をしている中央大学教授の山口真美(まさみ)氏によると、日本人を含む東アジア人の表情は目元に出やすく、日本人の赤ちゃんは生後7か月の段階で相手の目元に注目するという調査結果があるという記事でした。当時、「目は口ほどにものを言う」という諺を思い、マスク越しでも伝わる気持ちは、きっとあると思ったことを思い出します。

そして3年。マスクの着用は、個人の主体的な選択が尊重され、個人の判断

が基本となりました。基本的な感染対策が重要であることに変わりはありませんが、マスク越しの笑顔から満面の笑顔へ戻るときが来ました。実は、先ほどの話には続きがあって、赤ちゃんが相手の顔を見出すポイントは、上に2点の目、下に1点の口があること、だそうです。そうやって顔を認識したうえで、目元に注目をするのだそうです。やはり、満面の笑顔で向かい合うことに大きな意味がありそうです。

あわせて、皆さんの挑戦できること、活躍できる場も、徐々にコロナ禍以前に戻っていくことが期待されます。皆さんの今年の目標は何ですか。「得意科目のテストで高得点を取る」「より高いレベルの資格取得・検定に挑戦する」「部活動で全国大会に行く」「希望の企業に就職する」「第一志望校に合格する」コロナ禍を経験して、あたりまえの今日という日のかけがえのなさを知った今、皆さんには真剣な気持ちで自分の夢に向き合って、その実現のためにやるべきことを続けてほしいと切に願っています。

皆さんのこの1年間の大いなる飛躍を期待しています。生徒も教職員もともに成長する学校を目指して、一緒に頑張りましょう。

以上で令和5年度第1学期始業式の式辞といたします。

令和5年4月10日

愛媛県立東予高等学校長 渡邊 琴子